

「真理と信仰と自由」

「ほんとうに信仰を持っているなら、ほんとうのことを言ってやらねば気の毒だと思い、日本は負けますよ、とそういったんです」ⁱ

鈴木弼美(1899-1990)が尋問に来た特高警察にこう対応したため、1944年6月、鈴木と友人・渡部弥一郎は治安維持法違反によって8ヶ月間、獄中生活を強いられる。

鈴木は内村鑑三の弟子として、山形・小国に宣教使命が与えられ、1934年、基督教独立学校を設立する。けれども1937年より6年間戦争に応召。ようやく除隊してきた矢先の逮捕だった。戦後、基督教独立学園高校として再開。学園のHPには「戦争を拒否し、天皇を神としないため」特高に逮捕されたとある。

私が49期生として入学した時、すでに鈴木は召天していた。2年時、私は山ぶどう酒事件を起こし無期停学になるが、その時に渡されたのが、鈴木著『真理と信仰』だった。物理学者でもあった鈴木の信仰論は、内村に通じる明快さと真・信があり、心打たれた。

鈴木の口ぐせは、「真理を求めて考えなさい」であり、「真理とキリスト教とどちらを取る？」と聞かれれば「真理を取る」と答えた。これは「真理を求めてよく考えれば必ずキリスト教信仰に至る」に繋がっていく。ⁱⁱ

鈴木の所に来た特高警察は、警察内で内村鑑三関係の研究会を行った人が結婚の仲人だったため、その人物の名前を出して近づいていった。「ほんとうに信仰を持つ」のなら「ほんとうのこと」(真理)に至ると考える鈴木は、彼に告げたのだろう。「日本は戦争に負ける」こと、そして「天皇は神ではない」ことを。

文芸評論家・加藤典洋は、たまたま読んだ本で鈴木弼美の逮捕時の経緯を読み、はたと気づく。こんなことをやってのける特高は、当時小国に派遣されていた父親に違いないと。1979年、すでに30年以上が経っていたが、加藤は父親に問いかけた。

「鈴木弼美を訪問し、内村鑑三の研究会のことを使って逮捕した特高警察とは、お父さんだったんじゃないか」と。問いかけると父は驚き、自己弁護めいたことを言ったのを聞いて、加藤はカッとしてしまう…。ⁱⁱⁱ

これを読み、何ともやりきれない思いが残った。加藤の父も鈴木弼美も、もし戦争

が、治安維持法が、「天皇教の強制」がなければ、このようなことにはならなかった。特高の弾圧によって殺されたキリスト者たちも多くいた中で、鈴木は幸いなことに拷問やでっち上げもなく、不起訴になる。だからといって、加藤の父の行為が正当化されるわけではない。一人の人間としてそこに責任が、罪が生じる。それはずっと背負っていかねばならない。

もう一つ胸に刻まれたのは、鈴木弼美の持つ「自由」だった。「イエス・キリストの神がただ一人の神」であり「天皇は神ではない」と特高警察に向かって言いのける「自由」を持っていた。初代キリスト者たちが、パウロやバルナバが、弾圧の中でも、自由にかつ勇敢に福音を分かち合った姿と響きあっている。

東京・東村山で私が通った公立中での卒業式で、「日の丸・君が代」を巡って一波乱あった。まだまだ先生方も一色ではなく、式前日に、校長が生徒たちと話し合いの場を1時間持つことになった。その前夜、家にある資料を自分なりに読み込み質問原稿を作成した。「旧日本軍のシンボルであった『日の丸』、天皇讃歌として日本のみならず各植民地で強制された『君が代』は、出すだけで痛み悲しむ人たちが沢山いる。なぜそれを卒業式でしなければならないのか」といった内容だった。

そして迎えた話し合いの場で、教頭が開口一番、「校長は用事があるので10分で切り上げる」と発言。向き合おうとしない「大人」のずるさに、一気に心拍数が上がった。手を高く挙げ指名されると、震えながら発言しその最後に、「こんなことも分からないのか、このバカ!」と叫び、一人号泣した。校長は真っ赤になり、体育館は静まり、「佐藤、謝れ!」とパンチパーマ体育教師の怒号が響いた…。

最後の叫びは反省しつつ、それでもまだ当時は、話し合いの場があっただけでも幸いだったと感じている。もはやこんな場はありえないのではないか。

「イエス・キリストの神がただ一人の神」であり「天皇は神ではない」と私は、そしてあなたは告白し続けることが出来るだろうか。その自由を失っていないだろうか。

「真理はあなたたちを自由にする。」(ヨハ8:32)

ⁱ 加藤典洋『大きな字で書くこと』岩波書店、2019年、p.26。

ⁱⁱ 今野利介「偉大なる非常識人・基督教独立学園創立者鈴木弼美のこと」『今井館ニュース』44号、2019年、p.1。

ⁱⁱⁱ 加藤典洋、前掲、pp.25-28。